

——一九七一年に出版され、世界的な大ヒットとなった『ジャッカルの日』は、OASというフランス極右民族主義者の秘密軍事組織が、フランス大統領シャルル・ド・ゴールを暗殺すべく雇ったジャッカルが主人公でした。後に映画化もされ、いまだに読み継がれている名作です。主人公のジャッカルはこれまでのヒーロー像を覆す存在でしたが、彼は主役であると同時に悪役（Villain）だといえるのでしょうか？

フォーサイス 当時はそう考えられていました。ジャッカルはプロの雇われ暗殺者でした。人を殺すのが仕事で、それで収入を得ていたのです。七一年当時、殺し屋というのはアマチュアか、政治的な理由で特別に仕立てられているものだと、皆が思っていたんです。プロの殺し屋といふ考えは、当時は新しかったのです。また、殺し屋だから当然悪である、ということのように考えられたのかもしれませんが。

——ド・ゴール大統領とOAS間のアルジェリア独立を巡る対立が背景にあり、双方ともに自分た

「ジャッカル」の 生みの親が語る悪 フレデリック・フォーサイス (作家)

インタビュー＝大野和基（国際ジャーナリスト）

プロの暗殺者を描き、
映画化もされた小説『ジャッカルの日』。
ジャーナリストとして、スパイとして活動してきた
作者フレデリック・フォーサイスが、
豊富な取材・諜報活動の中に見いだした
「悪」に迫る。

この信条に基づいて動いています。つまり、お互いを敵（悪）とみなしているわけです。ジャッカルはそこに巻き込まれ、「職務」を果たそうとしているだけにも見えます。

フォーサイス そうです。OASはアルジェリアを独立させるのは、大いに間違っていると考えていました。ド・ゴール大統領はその気持ちと同じ強さで、植民地の独立は不可避であると思っていました。イギリスに目を向けると、そのころまでに大英帝国全体に植民地独立の気運が高まり、四七年にインド、五〇年代はアフリカ諸国が相次いで独立しました。ド・ゴール大統領も同じことをしようとしたわけです。でも、OASはいかなる代償を払っても、アルジェリアを手放すべきではないと考えていたのです。

アルジェリア戦争（一九五四～六二年）当時、彼の地には五〇万人のフランス兵がいました。独立を阻止するためとはいえ、多すぎです。さらにその前には、第一次インドシナ戦争（一九四六～五四年）があり、ディエンビエ

ンフーの戦い（五四年）でフランスは撤退せざるを得ませんでした。二回の戦争を経て、フランスは財政的に苦しくなっていたわけです。

ド・ゴール大統領にとって、OASなどの輩は反逆者、つまりフランスにとってはテロリストでした。でも、彼らは彼らで、自分たちを愛

国者だと考えていました。どちらの側も自分は愛国者で相手は反逆者と考えていたわけです。私は、一九六二年当時、ロイター通信の特派員としてパリに駐在し、この取材をしていましたので、ド・ゴール大統領側とOAS側双方の活動を目の当たりにしました。もし、ド・ゴール大統領が撃たれたら……。OASは右派から大きなサポートを得ていましたから、もし暗殺に成功すれば、内戦になっていたはずですよ。

悪役の作り方

——ストーリーにおいて悪役という存在をどう考え、どう造形するのでしょうか？

フォーサイス 例えば『戦争の犬たち』（一九七四年）では、キャット・シャノンという傭兵が主人公です。彼はそこにある鉱物資源を欲しがる大物の資本家に代わって、アフリカの小国を転覆しようとしたから、悪役ともいえます。でも、もちろんその国自体は独裁政治でしたので、この場合は双方が悪役だったかもしれません。このあたりは、人物造形においてなかなか難しい部分です。

——そういう意味では、悪役というのは相対的に存在するということでしょうか？

フォーサイス そうですが、私はまだ未熟でしたので、『ジャッカルの日』では主人公を悪役、殺し屋として描き、ヒーローを警察として描いていきました。でも、すべての女性がジャッカルと寝たがっていました（笑）。

——『オデッサ・ファイル』（一九七二年）ではナチスという極大の悪の残党と、それを追う者の姿が描かれます。ナチスは悪でありながら、社会はそれを取り込み、体制維持のために利用している面もあります。

フォーサイス 当時の問題は、ナチスであった多くの人が、警察、上級公務員、ビジネスマンになり、それぞれの組織の中で重要な職に就いていたということです。彼らは何とかして、ナチスに関わっていた過去を消していました。私はこの作品で、七〇年代のドイツについて書きましたが、その頃のドイツは良心の危機に陥ったのです。それは、戦後生まれの若い世代が、自分たちの父親がやったことを知らなかったからです。そして、彼らは調査を始めました。

最終的に若者たちは、「なぜ世界が我々のことを嫌っているのか、なぜ我々がナチスと呼ばれるのか知りたい。我々は一九五〇年に生まれ、二〇歳になったばかりだ。戦争が終わったのは生まれる五年前にすぎないが、なぜ我々が責め



ロンドン郊外の自宅にて。2019年12月撮影。写真＝斎藤久美